

第6回 九州保育三団体研究大会

鹿児島大会 報告書

すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして



泣
こ
か
い

飛
ぼ
か
い

泣
こ
よ
っ
か
ひ
っ
飛
べ

令和
元年

7月11日・12日・13日

全体会会場

鹿児島市民文化ホール

分科会会場

鹿児島サンロイヤルホテル
ホテルウエルビューかごしま・マリンパレスかごしま
ベストウエスタンレンブラントホテル鹿児島リゾート

主催 九州保育三団体協議会

共催 九州社会福祉協議会連合会・(社福)鹿児島県社会福祉協議会

主管 (社福)鹿児島県保育連合会

後援 厚生労働省・内閣府・鹿児島県・鹿児島市・(社福)全国社会福祉協議会
全国保育協議会・全国保育士会・(社福)日本保育協会・(公社)全国私立保育園連盟

目次

大会概要報告	・・・	1
式典・基調講演	・・・	2
九州ブロック保育士会セミナー	・・・	3
第1分科会 新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～	・・・	4
第2分科会 配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて	・・・	7
第3分科会 保育者の資質向上を図る	・・・	10
第4分科会 地域の子育て家庭への支援の充実にむけて	・・・	15
第5分科会 子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク	・・・	19
第6分科会 「食を営む力」の基礎を培う食育の推進	・・・	22
第7分科会 保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～	・・・	24
第8分科会 公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割	・・・	28
特別分科会 今だから伝えたい“郷土”の教育力	・・・	31
交流会報告	・・・	34
総会・記念講演・次期開催地引継ぎ式・閉会式	・・・	35
第6回九州保育三団体研究大会 大会宣言	・・・	36

大会概要報告

九州保育三団体関係者が、明治維新から150年の時を超えて、新たな幕開けとしてこの鹿児島の地に集い、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」を大会スローガンに掲げ、令和元年7月11日から13日の3日間にわたり、第6回九州保育三団体研究大会鹿児島大会が開催されました。

大会初日は、オープニングとして、鳳凰高等学校書道部による「令和 美しき時代へ」のパフォーマンスを披露していただきました。記念式典に続き、基調講演では、厚生労働省子ども家庭局保育課の齊藤克也課長補佐より「保育の現状と取り組みについて」をテーマに、資料に基づき説明をしていただきました。また、九州ブロック保育士会セミナーでは、保育士が共通の問題意識をもって、日々の保育に取り組むことを目的として、NPO 法人保育の安全研究・教育センターの掛札逸美代表理事より「真の『子どもの最善の利益』のために、保育の価値とリスクを見直す」をテーマにお話しいただきました。

大会2日目の分科会は、5つのカテゴリーで8つの分科会と特別分科会を開催しました。第1分科会から第8分科会では、3か園若しくは地区保育会の複数園合同での発表があり、それぞれの実情に応じた様々な取り組みに対して、参加者から多くの質疑が出されました。後半のグループ討議では、それぞれのテーマに沿った意見交換や質疑応答などが行われ、日頃の保育を振り返る意義深い時間となりました。

特別分科会では、第1部として、志學館大学の原口泉教授より「維新の原動力となった郷中教育」についてお話しいただきました。第2部では、原口泉教授にコーディネーター、一般社団法人自彊学舎の宮内信正代表理事、長崎県さざなみ保育園の大長光一園長、大島地区子ども会育成連絡協議会の保池穂好会長にパネリストをお務めいただき、パネルディスカッションを行いました。

交流会では、地元食材を使った郷土料理や鹿児島県内各地区の銘酒に舌鼓を打ち、サクソフォン奏者の吉澤レイモンド武尊氏とギター奏者の山崎トム氏からなるデュオ「Alsomitra」による演奏と、地元出身のジミー入枝氏による楽しいトークや歌などを楽しみ、交流を深めました。

大会3日目の総会では、前回熊本市大会の報告、分科会報告、大会宣言の採択が行われた。その後の記念講演では、県出身タレントの哀川翔氏より「私の子育て術」についてご自身の実体験など貴重なお話をいただきました。最後に次期開催地の福岡市へ大会旗を引き継ぎ、大会の幕を閉じました。



1日目 7月11日(木)

式典（鹿児島市民文化ホール第一）

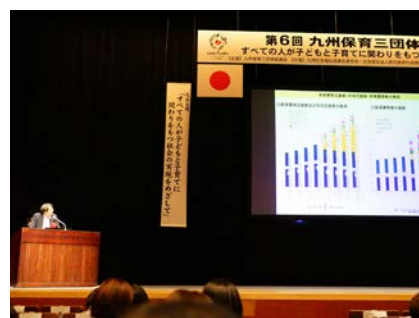
- (1) 開会の辞
- (2) 国会斉唱
- (3) 保育関係物故者に対する黙祷
- (4) 児童憲章朗読
- (5) 主催者あいさつ
大会会長（九州保育三団体協議会会長）佐藤 成己
- (6) 開催地あいさつ
鹿児島県保育連合会 会長 幸多 健次
- (7) 歓迎あいさつ
鹿児島県知事 三反園 訓 氏
鹿児島市長 森 博幸 氏
- (8) 来賓祝辞
日本保育協会 理事長 大谷 泰夫 氏
- (9) 来賓紹介
- (10) 祝電披露
- (11) 表彰式
 - ① 九州保育三団体協議会表彰（39名・1ヶ園）
 - ② 九州社会福祉協議会連合会会長表彰（121名）
- (12) 被表彰者代表謝辞
- (13) 花のおさなご斉唱
- (14) 閉会の辞



基調講演（行政説明）

演題 「保育の現状と取り組みについて」

講師 厚生労働省子ども家庭局保育課
課長補佐 齊藤 克也 氏



子ども・子育て支援制度のポイントや概要、地域保育事業や企業主導型保育事業について詳しく説明を頂きました。併せて子ども・子育て支援新制度や保育園等定数・利用児童数・保育園等数の推移に伴い女性の年齢階級別就業率と1・2歳児の利用率についても説明を頂きました。また待機児童等の状況や保育の受け皿の拡大、保育士等の処遇改善の推移やキャリアアップ研修の分野及び内容の説明も頂きました。

最後に幼児教育・保育無償化の制度の具体化に向けた方針の概要についての説明をされ基調講演は終了しました。

九州ブロック保育士会セミナー（鹿児島市民文化ホール第一）

演題 「真の『子どもの最善の利益』のために、保育の価値とリスクを見直す」

講師 NPO法人 保育の安全研究・教育センター代表理事 掛札 逸美 氏

「第6回九州保育三団体研究大会」が鹿児島市において、関係各位のご支援により盛大に開催されましたことを、開催地として心より感謝申し上げます。また、九州ブロックセミナーにも、430名の多くの方に参加していただき、励ましや労いの言葉もたくさんいただきました。本当にありがとうございました。

セミナー式典の部におきまして、間所あゆみ九州社会福祉協議会会長より趣旨説明を、来賓を代表して全国保育士会名誉委員・顧問の上村初美様よりお祝いの言葉をいただきました。また、全国保育士会副会長の北野久美様には全国保育士会の活動状況についての報告をしていただきました。

スキャン募金の災害時の活用や研究大会の取り組み、研究発表の学会助成金など保育の質の向上に努めていることなど様々な取り組みの報告をしていただきました。

研修の部では、NPO法人保育の安全研究・教育センターの代表理事であります掛札逸美先生に「真の『子どもの最善の利益』のために、保育の価値とリスクを見直す」をテーマにご講演していただきました。保育・教育における「価値」と「リスク」の線引きが基本で常に価値とリスクは天秤の上にある状態である。活動として適切でないものを明確に見分けることで質の向上につながる。近年社会の見方が違ってきており、社会が保育をどう見ているか保護者の価値観も多様化してきており、子どもを育てる価値とリスクをしっかりと見極め、明確化していくことが大切です。「これぐらいは」と判断せず、保護者に伝えること、伝えて選ばせることが必要です。また、自分の園の価値は何か、リスクは何か、子どもから奪っているものは何かを

考え保育していく必要性について、今一度園内で研修していくことも大切です。

子どもたちの最善の利益のために、「すること」「しないこと」の線引きも必要で、保育者の心を守るために、保護者の都合を優先させていないか、自治体の顔色を見ていないか、「子どもの最善の利益を優先する」という態度をあらかじめ表明したうえで、保護者や自治体と向かわなければ、保育の根本的な価値は守れず、子どもの育ちも命も保育者の心も守れない。また、子どもが育つことを保証するため、園や職員を守るためにも「価値と

リスク」を伝えることの必要性についてご講話していただきました。

社会や保護者の価値観の違いや環境が変化してきている今だからこそ、子どもたちの最善の利益のために園の価値について考えていく機会だと強く認識し、会を閉じました。

（報告者 鹿児島県保育連合会保育士会会長 下園美由紀）



2日目 7月12日(金)

【カテゴリー1】子どもの育ちを保証する

保育所・認定こども園等の大きな役割は、子ども自身が自ら持っている発達する力を生かし、側面的に支援することをとおして、その子どもの発達を保障することにあります。

子どもの発達支援を中心に据えた保育を展開するために、質の高い保育について研究を深め、また、その保育を実践する人材の育成、研修の充実に取り組みます。

◆第1分科会 新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者数227名

子ども・子育て支援新制度では、「保育の必要性（の認定）」に基づいて、保育が提供されます。また、幼児期の教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進するとの子ども・子育て支援法の趣旨から、認定こども園制度を改め、学校及び児童福祉施設としての法的位置づけをあわせ持つ新たな幼保連携型認定こども園が創設されました。保育所は、これまで保育所保育指針に基づき、児童福祉施設として、各保育所における創意工夫のもと、保育実践をすすめてきました。認定こども園では、保育所保育指針を踏まえた「認定こども園教育・保育要領」に基づき、保育が展開されます。

本テーマでは上記実践のもと、子ども一人ひとりの健やかな育ちを保障し、保育の質を向上していくための手法や、さらに今後の保育をめぐる動きのなかで大切にすべき保育実践の視点について研究を深めます。

座長	鹿児島県	松下保育園	主任保育士	坂口 志織
助言者		中村学園大学	教授	那須 信樹 氏
意見発表者	長崎県	あそか保育園	主任保育士	堀口 和代
	熊本県	もみじ保育園	保育士	佃 寿美
	鹿児島県	大心寺二葉保育園	保育士	内匠 裕子
幹事	鹿児島県	阿多こども園	主幹保育教諭	下園 美由紀
記録	鹿児島県	坊津もりの風保育園	主任保育士	日高 真也
	鹿児島県	阿多こども園	保育士	小鷹 優太

1 発表要旨

(1)『子どもの無限の可能性～遊びや生活の中で自ら育つ子どもの力～』

長崎県 あそか保育園

長崎県の島原半島雲仙岳の麓の吾妻町にあり、自然いっぱいに囲まれた環境にある保育園で、定員80名現在84名、22名の職員で「子どもたちの何を育てたいか」「今の私たちにできる保育とは」をテーマに取り組んでいる保育園である。今回は、10年前から取り組んできた「日常生活の見直し」で子どもたちの変化について研修や話し合いを重ねた結果、職員間の連携が深まった。

特に、正しい姿勢で集中して話が聞けるようにする取り組みについては、朝の集まりの際、机なしで姿勢に注意して座られるよう声掛けを考え、足置きの準備、椅子の高さの調節に配慮し生活していくよう取り組んだ結果、体幹が整い、正しい姿勢がとれるようになった。また、食育では、食への興味や大切さ、マナーについても栄養士と協力連携し進めたことで、食に対しての興味やマナーが身についてきた。箸の使用についても、1歳からスプーンの握り方や力の加減に注意して、手指の機能を確認しながら子どもに合ったスプーン選びや箸の使用を行った。また、六角箸を全員が使用することで、全体的に箸の握り方がよくなった。



（２）『楽しく体を動かすことの大切さ～２歳児の心と体の育ち～』

熊本県 もみじ保育園

熊本県の天草のもみじ保育園は、早朝５時から開園、農繁期の農家からの要望を先取りし、60人定員から始まった。最近では少子高齢化・過疎化の典型的な地域で現在の在籍園児は23名になった。近年、PM2.5の影響と過疎地の耕作放棄等で野獣の危険があり、園庭での遊びや散策ができなくなり、屋内中心の保育になってきた。自然と触れ合う機会が減ったことより、近年、体力・気力の低下を感じるようになった。室内での活動を考え、幼児期運動指針をもとに取り組んでいった。

保育所保育指針の内容より、子どもたちの自由遊びや運動遊びの動きを調べると、「走る・登る・跳ぶ」の動きが中心で「蹴る・投げる・もぐる・押す・引っ張る」の動きに偏りがあったことに気づき、意識して取り組むようにした。ピアノに合わせて「リトミック」を楽しんだり、サーキットでくぐる動きを体感したり、手作りの電車を引っ張ったり、指針に記載してあるでこぼこ道・坂道・トンネル・階段のある教会を目指すコースを選んだ毎日の活動を積み重ねていった。

今回の取り組みで、子どもの安全を考えると室内中心の保育になったが、今の時期に必要な基本的な動きを考え、意識することで、体力、気力を身につけることができていった。また、楽しく体を動かすことで、子どもの心と体の育ちをたくさん感じる事ができた。今後もより良い子どもたちの成長を願って楽しく保育をしていきたい。

（３）『子どもの心と体の発達を促すための環境と援助の工夫』

～運動遊び（体を動かす遊び）を通して～』

鹿児島県 大心寺二葉保育園

鹿児島県の薩摩半島中心に位置し、武家屋敷や特攻平和会館など歴史的な遺産が残る知覧町にある定員60名の保育園で、様々な体験や経験を通し、意欲的に遊ぶ心、思いやりのある心、豊かな感性や表現力、想像力が育まれるよう保育に努めている。

保育現場では、気になる子どもの姿や保育者の課題も挙がってきた。運動能力の差や生活経験の違いから、運動に対する苦手意識が強く、集中力、持続力に欠け、姿勢の保持ができず、落ち着きがない、友達との関りがうまくできず、自己中心的な姿が多くみられるようになってきたことより、保育所保育指針を振り返り、「育ってほしい子どもの姿」として職員間で意見を交わした。「できた」という成功体験で自信へつながってほしい。挑戦する楽しさから意欲が持てるようになってほしい。体を動かす中で、保育者や友だちとの関わりを深められるようになってほしい。などをテーマに園内研修を重ね、特に保育所保育指針の「健康」及び「人間関係」の内容と幼児期運動指針を参考に実践計画を作成し、

実践していった。職員間では、研究の記録や運動遊び年間指導計画の期毎の評価・反省、子どもの環境構成、保育者の援助を見直すなど研究を進めた。保護者への働きかけでは、家庭での過ごし方のアンケート調査や、保育参観を利用した親子での運動遊び・リトミックなど親子で楽しんで体感してもらった。子どもの変化では、いろいろなものに興味を示すようになり、自分たちで遊びを発展して



いく姿や音楽に合わせて自然と体を動かし楽しんでいる姿が増えた。職員の意識の変化がみられるようになり、職員間のつながりや連携が感じられるようになった。

「体を動かす遊び」を通して子どもたちが意欲的に挑戦する姿が工夫し展開できるよう研究を深め、今後も保護者参加型の活動を充実させ、保護者との連携により楽しく体を動かすことの意義を、多くの保護者に啓発していきたい。

2 討議内容

(1) 質疑応答

あそか保育園

【Q】箸の使用にあたっては、握り方や個人差で、家庭との連携も大変なのでは、どのように行っているか教えてほしい。また、エジソン箸の使用はどうしているか。

【A】2歳で下握りを確認後、三点握りへ、成長にあわせ、箸に移行している。六角箸を園で準備し、エジソン箸の使用はしない。握り方が、うまくいかない場合は、スプーンの使用で、持ち方についても確認している。

太心寺二葉保育園

【Q】園内研修の時間を多くとっていますが、どのような時間で行っていますか。

どのように変化しましたか。

【A】年に3回は、外部講師を招いての研修の実施を行っている。月に1回は、必ず出席するようにしている。テーマに沿った話し合いや、外部講師をお願いするなどで職員の意識づけになり、個々への配慮ができるようになった。

(2) グループ討議

各グループ(5～6人)に分かれて、各園に対して素晴らしい内容についてそれぞれ記入するように進められた。各園ごとに配布され、コメントを記入してもらうなど、今後の保育活動の参考にできるような配慮が行われた。

那須先生より

太心寺二葉保育園・・・保護者を巻き込んで一緒に子どものことを考えている。子どもを理解している。

あそか保育園・・・遊びの充実性がある。場面でのイメージ能力がよい保育をしている。

もみじ保育園・・・2歳児への配慮、活動が40分行われるすばらしさ、散歩の距離が長く、職員の頑張りがあふれている。自然の豊かさは、各園の特色でうらやましい。



3 まとめ及び助言

子どもたちは、私たち大人が見ることのない未来社会へおくる生きたメッセージがある。それぞれの園についても見直しが必要である。残さなければならないもの改善しなければならないものを共に考え、子どものための保育を作り上げていくことが大切である。また、保育内容の記載のイメージは、0歳から学びにつながっており、幼児期の成長はとても大切である。保育所保育指針を見直して、記載内容と現場を比較することも重要である。

環境・こどもの実態を把握する。「言葉」を子どものために選んでいるかを見直す。例)・・・慣らし保育→出会い保育など職員間の共通理解・日々の振り返り・保護者や地域の人との関係作りが大切。子どもとしての存在を見直すこと。子供から学ぶこともある。大人が成熟していて、子どもが未熟でない。大人が学ぶ姿勢を考え直すことが大切である。



◆第2分科会 配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて

参加者数 258名

保育所・認定こども園等では、発達障害など配慮を必要とする子どもの増加が指摘されてきています。また保護者自身が生活面など何らかの課題をもち、子育てに困難が生じるケースも増えています。

本テーマでは、こうした子どもや保護者に対する保育・子育て支援関係者としてのかかわり方、あるいは保育者としていかに寄り添い、支援をおこなうべきかについて、研究を深めます。

座 長	鹿児島県	法輪保育園	園長	鬼塚 久明
助言者		鹿児島国際大学	准教授	有村 玲香 氏
意見発表者	熊本市	旭保育園	主任保育士	一門 直美
	宮崎県	松山保育園	保育士	正岡 義勝
	鹿児島県	奄美市立小浜保育所	保育士	蘇畑 美保乃
幹 事	鹿児島県	妙見保育園	主任保育士	下窪 節子
記 録	鹿児島県	法輪保育園	主任保育士	鬼塚 早苗
	鹿児島県	つじみ保育園	園長	中村 修一

1 発表要旨

(1) 「困りから家庭支援へ～支援ネットワークの構築」

熊本市 旭保育園

熊本市南区に150名の定員を構える旭保育園。30名の職員の中に発達支援コーディネーター3名、保育ソーシャルワーカー中級3名、初級2名、早期発達支援士2名、配慮を要する園児のために園体制を整え、発達支援に関しても「ピアジェ理論」をもとに先進的かつ専門的に取り組んでいる園である。今回、Aちゃんのケースについて、発達支援や園生活における「社会性」を育むために多角的にアプローチをかけ支援に取り組んでいたが、先の熊本地震の影響や家族背景、そして、家庭におけるAちゃん

を取り巻く環境を支援する為に保育園、そして熊本市の支援者ネットワークを活用し支援に取り組んだ。

注目すべきは、Aちゃんが保育園を休みがちな状況を「どうにかしよう」と母親との面談、クラス担任も持ち上がりで配置、そして発達支援士からの専門的アプローチ、また園長からも母親に心開いてもらうように、日頃から温かい支援をおこない互いの信頼関係を構築していた。しかし、母親の育った環境や熊本地震の受入病院の減少の影響で支援が先に進まず、母親の子育てについての悩みや不安は改善できない状況であった。

このような状況を踏まえ、旭保育園においては、園の対応や今後の計画を立てる際、「関係機関との連携」において、家庭の困りごとの改善、「子どもの背景から考える支援」において、Aちゃんの生活リズムの改善、療育機関とのつなぎと連携、支援者ネットワークの構築、「母親の支援」において保健師、小学校、保育園からのアプローチとして、母親の心理的状況を踏まえての支援計画を立てた。そして具体的な「発達・保護者（家庭）支援目標」をもとに、今後とも支援者ネットワークを中心として、Aちゃんの将来の支援者（キーパーソン）を見つけ繋げ、長期にわたっての支援する必要がある。このように温かく長期支援を掲げる旭保育園は、卒園児が気軽に遊びに来たり交流も盛んなので、Aちゃん、そして、その家族とともに数年後も笑顔で会えることを心から願って園でできる支援をしていきたい。



（２）「配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて」

宮崎県 松山保育園

延岡市街地より西部に位置し、緑豊かな環境のもと、独自の家庭支援として公民館などを借用しての「青空保育」や、また家庭支援に取り組む中での育児相談を通じて、子育ての不安感が軽減できる取組みを園独自に行っている。

保育現場で保育をしている中、配慮を必要とする子どもが増加している傾向にあり、その配慮も多様な問題に直面している。その中で今回３件の事例を挙げ、「乳幼児発達評価表」「延岡式アセスメント・支援総合ツール」を活用して支援を行ってきました。ツール活用でのメリットは「PDCAサイクルが明確で実践しやすい」デメリットは「検査結果に固定概念が出てしまうのではないか」ということです。今回「支援をする上で大切にしてきたこと」「なぜ、その支援が大切なのか」「気づいたこと」の３つについて研究してきましたが、一番大切なことは、そのツール活用するためには、まずは信頼関係を築くということが大切であるということを再認識した。

（３）「今私たちにできること～配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて～」

鹿児島県 奄美市立小浜保育所

奄美大島のほぼ中央、奄美市名瀬に150名定員の公立保育所である小浜保育所、恵まれた自然環境の中で、子ども一人ひとりを大切に、保護者から信頼され地域に根ざした保育所を目指している。今回、配慮を要する子どもさんや家庭支援にむけての取組として、園並びに関係機関との支援並びに連携に取り組んだ。

まずは、気になる子への園での支援として、保育所内ケース検討会を設け、子どもの生育歴や現在の状況、家庭環境などについて確認・検討し、職員間で情報を共有しながら方向づけをしていくこと

を核として、次の段階へ進めていく体制が関係機関としっかり連携を取りながら進めた。

今回 Y ちゃん(2 歳)のケースは、発達について配慮の要する子であったが、入所前面談での気づき、そして入所後の様子も配慮を要するため、保健師への相談や発達障がい地域支援のアプローチをいただきながら、療育施設と併行通園する方向で進めることになった。保健師との情報交換や年 1～2 回実施される奄美市事業の「やんちゃぼう相談」のおかげで、保護者が相談しやすい環境が整備できた。当該保育所だけではなく、他の保育所と協働・共有していくことでボトムアップ体制が構築され、名瀬地区全体の職員の資質向上にも取り組んだ。また、園内研修の取組として、認知の偏りを実感することで配慮を要する子の立場を実感する軍手を使うワークショップや効果的なコミュニケーション方を学ぶ手段として、「ラポール」心のつながりと信頼関係を築くために、まずは自分自身を理解するように努めた。



今回のテーマが年々広範囲にわたり、配慮や支援が必要な子どもも増え、内容も多様化しているので、今までの取組や培ったものを更に掘り下げていく必要と、アレルギー児も増え、担任だけではなく給食担当も苦慮しているので、人的環境や情報共有などを徹底し子どもの育ちを保障できるように研鑽を重ねていきたい。

2 討議内容

(1) 質疑応答

旭保育園

【Q】配慮を要する園児は保健センターや医療機関と連携を取りながら進めています。稀なケースですが、保健センターや医療機関、保育園での支援を一切受け入れず、また保健センターや医療機関などを拒否するケースがございますか。その際、どのような対応を取られますか。

【A】実際そのようなケースは、ございます。その際、保護者との「コミュニケーション」をしっかり取るということです。注意点として否定的ではなく、肯定的に対応することを最初のスタートして、保護者から「私の子どもが先生からこう思われている」など嫌な印象を最初で持たせないこと一保育者の意見ではなく園で配置しているソーシャルワーカーや専門的知識をもった立場からの意見として話をしていることを保護者に理解をいただきながら対応を取っています。

松山保育園

【Q】支援ツールは、どこかで買えますか？ネットで見れますか？

【A】延岡市が独自で行っているツールなので見ることはできませんが、乳幼児発達評価表はネットでも見れます。

小浜保育所

【Q】ワークシート、とても興味深く拝見させていただきました。こういったチェックシートは他にもありますか？

【A】紹介したワークシートは「藤原里美先生の多様な子どもたちへの発達支援 園内研修ガイド」の著書を参考にして、ワークシート例を活用して取り組んでおります。

(2) グループ討議

助言者より一つの図形から隠れている漢字がいくつあるのか問われ、一人だと数が少ないもののグループだと多くの答えがあり、考えや知恵の出し方が様々であることを経験した後、①配慮が必要と

は何か？②配慮をすることで目指すことは？③配慮を取り入れた保育実践とは？④この3点の評価は、どうやって行うのか？をテーマに討議が行われた。グループ発表では、改めて「配慮とは何か？」といわれると迷った。難しかったので自分たちが、どのような場面で実際活用しているか思い浮かべて話合った。

助言者からのアドバイス

「配慮」という言葉は、便利だから私たちは多様に使っているが配慮とは具体性がないので明確にしてから使った方がよい。



3 まとめ及び助言

子ども・家庭にとって保育者は「重要な他者」になる。その為に専門性を高めることが必要である。子どもたちが自分の人生を進んでいけることができるようにすることを目指して支援していく。私たちの学び方で学べない子には、その子に合わせた方法で学ばせる。だから支援上の工夫が大切。つまり、私たちが行う配慮を取り入れた保育、支援で対象者の「増やしたい行動は、増えたのか？」「減らしたい行動は減ったのか？」を評価する。

どの園でも配慮や支援が必要な子どもが増え、内容も多様化している中、配慮が必要とは何か？を考え対象者の困難さ、支援上の工夫の目的、子に応じた手立て、そして評価するPDCAサイクルを明確化し職員間の情報共有、関係機関との連携を図りながら、子どもたちの育ちを保障するよう努めていきたい。

◆第3分科会 保育者の資質向上を図る

参加者数207名

保育所・認定こども園等における今日的状況として、職員の就業形態や雇用形態の多様化の進展があげられます。そのため、職員間の連携、チームワークの形成や、職場全体としてのスキルアップに一層留意する必要があります。また、子ども・子育て支援新制度施行後、利用者のいっそうの多様化がすすむことが想定されます。

本テーマでは、保育所・認定こども園等の内外の研修や情報共有のあり方、保育者の自己評価など、職員の資質向上にむけた効果的な実践、さらには今後保育者にもとめられる資質向上のあり方について研究を深めます。

座長	鹿児島県	認定こども園建昌保育園	副園長	道山 大吾
助言者		元鹿児島女子短期大学	教授	坪井 敏純 氏

意見発表者	沖縄県	おおな愛児保育園	主任保育士	宮城 和美
			保育士	高江洲 麻民
	宮崎県	あおぞら保育園	主任保育士	迫間 智子
	鹿児島県	菱田保育園	主任保育士	甲斐崎 貴恵

幹事	鹿児島県	みどりが丘保育園	園長	藤本 尚子
----	------	----------	----	-------

記録	鹿児島県	認定こども園建昌保育園	主幹保育教諭	大森 千代美
----	------	-------------	--------	--------

鹿児島県 おりた保育園

主任保育士 山下 真由

1 発表要旨

(1) 『子ども一人ひとりが“いきいき”と過ごすための保育の見直し

～大人主導の保育から子ども主体の保育へ、そして人権の気づき～』

沖縄県 おおな愛児保育園

平成25年途中1歳児Aに対し複数の園児による噛みつきが続いた。当時、噛みつきは発達の過程としての認識であった、園児にはその行為に対し良し悪しを認識させる対処療法的保育を行い、保護者対応は行為への理解を求められる謝罪が中心だった。

保育の行き詰まりを感じていた中、保育有識者からの助言もあり、保育の見直しをはじめた。環境構成の研究を重ね、保育方法を模索しH28年4月から(乳児)育児担当制保育、(幼児)異年齢保育をスタートさせた。H26年度からの4年間、色んなところに園見学・たくさんの研修を行い、子どもの人権に十分配慮した保育を探求し、子ども主体の保育と実践の見直しを図った、子どもの姿がどのように変わったかを生活と遊びに分け、子どもの権利条約4つの柱に合わせて考察した。

以前の大人と子どもの姿は、大人主導の生活リズムのなかで、特に食事・排泄・着脱時間は慌ただしく流れ作業のような援助の仕方だった、大人や子どもの声が響き渡り騒々しい1日になる事が多かった。他園の研修から、生活は個々の生活リズムを把握し、日課の見直しや育児担当を取り入れたる事により、子どもとの信頼関係に繋がっていった、発達をより理解し援助することで「子どもの人権の保障」の気づきにもなった。遊びは一人ひとりの姿を観察していくことで、環境構成が明確化されてきた、子どもの姿に合わせ物的環境を整えることで、良く遊びトラブルも減ってきたと、実践したことが良い方向に結びついた。

【現在の大人の行為】と【現在の子どもの姿】からの子どもの人権(生きる・育つ・守られる・参加する権利。)への気づきとして、現在の大人の行為は、一人の発達段階に合わせた食事や遊びの環境を準備する。ゆったりとした育児行為を行うと丁寧に扱うようになってきた他、現在の子どもの姿は、食事を頂くマナーや姿勢が良くなる、休息したい時は自ら休息したり、自ら遊んだりして、主体的に行動できるようになった。他 保育を変えていくことで子どもたちの姿に変化が見られ、その子どもたちの姿から生きる・育つ・守られる・参加する権利の保障に繋がって行くことに研究を通して考えさせられたと話された。結果、研修を重ね見直しを行ったことで質が向上し、ゆったりとした日課や環境が整い、子ども同士の噛みつきやトラブルが減ってきた、以前の保育が大幅に改善されたことを話され、子ども主体の保育を探求していく中で、保育の本質は子ども一人ひとりの人権の保障や人格の尊重、同じくユニセフ「子どもの権利条約」4つの柱に沿った子どもの人権の保障にもつながっていることにも気付いた。



(2) 『保育者の資質向上を図る～保育の言語化の実践～』

宮崎県 あおぞら保育園

昨今の子育てをめぐる課題は複雑化し10年前と比べても一層深刻化している。少子化が進む一方で共働きが増え保育のニーズも多様化してきて、更に保育士不足が社会問題になり、同時に保育や保

育士に対する社会問題も深まってきていることを捉え、主任保育士として自園の保育士に対し国家資格を持つものとしての自覚や専門性を高める必要があることや、保育の大切さ重要性を保護者や地域社会へ発信する役割についても強く認識するようになったことから、質の向上に向けて新保育指針第5章「職員の資質向上」について謳われているなかで、これまでの保育を大切にしてきたという自負はあったが、専門家として言語化がすることが弱かったことに気づき強化することで、資質の向上に繋がると考え保育の言語化に取り組み始めた。

PDCA サイクルを研修で繰り返し保育の振り返り進めることで、少しずつ資質の向上に繋がってきたので、より専門的に子どもと心が通じ合う体験を意識し新たに「心の育ち報告」とし発表することにした。そこから更に「幼児期の終わるまでに育てたい10の姿」に照らし合わせながら記録・発表することで子ども一人ひとりの姿をしっかりと捉えたり、子どもの心の動き「非認知的能力」に注目することも出来るようになってきた。言語化に向けPDCA サイクルを繰り返してきたことで、エピソード記述だけでなく他の記録の仕方も変化が見られるようになった。事例からも記録の変化が良く理解でき職員の感想に、「一人ひとりの行動をじっくりと見たりするようになり、気持ちを考えたり、これからどんな行動をとるのか先を見通したり考えるようになった」など良い記述があった。最後に「言語化」を意識した保育の大切さを共有できたことは良かったと思う、また書いた記録を見直し、気づく、書き直すという作業は大変だと考えるがそれが資質向上に繋がったと考えている。更に今回、保護者への伝え方もスキルアップが図れたと感じている。今後も保育の言語化を意識した日々の保育を大切に保護者と連携しながら「子どもたちの未来」を育んでいきたい。

（３）『保育者の資質向上を図る』

鹿児島県 菱田保育園

子どもにどう対応すべきかわからないと保護者から相談を受けることが増えているように感じた。その背景に、人間関係の希薄化、便利な生活様式への移行、子育てしにくい環境や社会状況になっていることは否定できない。園児はもちろん保護者にとっても居場所が良いと感じてもらえるような場所でありたいと思っている。保育を実践するには保育者のより高い専門性とチームワークが問われることを実感していたので、保育者の資質向上のために3つの取組みを行った。

①行事保育を通して：子どもたちの成長の多くは経験や環境からの学びがほとんど、保護者に子どもたちの成長を確認してもらえきっかけになるのも行事で、子どもの成長をはさんで保護者と園側が保育感を共有することで、保育への理解を更に深めてもらえるのではと考える。

②保育者間の共通理解：職員会議は毎月はじめに、園に関係する職員が参加し目標・心構え・保育計画を確認したり、共通理解が持てるよう心がけている、日々の活動報告の会議は毎日行い、各クラス担当者の申し合わせも毎朝・給食会議は毎月・他行事打ち合わせは姉妹園との行事が多く担当者が意見を出し合い進めている、5月頃に3者面談を担任と保護者と2者で行っているが、子どもを真ん中に連携を取り合うと意味から3者面談としている。



③研修による学び：園全体の研修は年4、5回のうち1回は保護者会主催、他の園であまりされていない。毎月外部から臨床心理士の先生およびケース会議・弁護士による事例検討会・あすなろ広場（地域に園開放）あすなろだよりを地域に発行している。年間行事も四季や月に合わせて沢山おこなっている。終りに必要な支援をするには、保育者たちの視点が大切になってくるので、保育基準となりうる保育

理念を学んだり専門性を向上させるために学習する事が必要で、実践を通して学んだことを確認していくことが、統一した保育につながると考えている。職員間の意識の共有化をはかること、互いに意見交換しあうこと、また意見交換しやすい職場づくりもこれからも一層工夫が必要と感じた。

2 討議内容

(1) 質疑応答

おおな愛児保育園

【Q】取り組むきっかけになった理由

【A】1歳児の噛みつきがきっかけ「保護者がなぜ我が子だけが！」と相談があった。

子どもが真ん中、子どもの人権て何だろう？きかれた

あおぞら保育園

【Q】言語化するきっかけになったのは？

【A】次の日の保育につながってなかった。同じ敷地内で幼稚園から学ぶことを感じた。

【Q】毎月の職員会議は？

【A】18時30分～20時30分位まで（毎月16名）。

菱田保育園

【Q】時間について

【A】午睡が落ち着いたときに15分～30分程度（13時30分～）。

【Q】報告会議をするきっかけは？

【A】主任が知らないことが、重なった事が原因。

【Q】会議が多いのでモチベーションが続かないのでは？

【A】会議の雰囲気は和気あいあいとしている・保護者対応の確認の場になっている。

ひとりで抱え込む案件が減っている・解決につながっている所以で皆で共有できている。

(2) グループ討議

代表発表

12グループ：職員会議をやりたいが時間がない

1グループ：質の向上について

- ・お手伝いボードをつけて、手伝って欲しいことを書く
- ・処遇面、事務、製作をする日を決めている
- ・定時に帰るようにしている。

7グループ：研修会も園内外で

- ・悩み現状を話す（姉妹園で公開保育）
- ・毎日行う
- ・ビデオ撮影をして振り返る
- ・月に一回職員交換を行い高めている。



3 まとめ及び助言

3つの発表がそれぞれ大事でとても良く実践されているとお褒めの言葉を述べられた。専門性の部分は昔からの課題であり、保育者の資質向上の大前提であると話される。第1発表者の園に対し職員

が変わるまで置き去りにしてはならない。否定的なことはいけないのでプライドを傷つけないように進めること、上司が一人ひとり説得する、出来る人からやって行くだけではなく上手に説得することが必要。保護者の評価もあると、かたさもとれる。意欲は子どもと保護者からの後押しが必要でマニュアルも必要になるとアドバイスされた。会議はメモを取りながら聞くことは良くない。

行事に関して言えば、中身は日本の文化に触れる。どんな文化を選ぶか、パフォーマンスや評価を求める物は練習につながるので良くない、嫌なことは先ずしない、何のプラスにもならない。

最後に職場においての離職防止に努めてほしいという点から、離職の問題に取り組む。専門性と一緒に取り組むことが大切、業務改善として給与・長時間労働・超過勤務・有給休暇の休みの消化など



あげられ、そして、やりがいのある職場として、ライフスタイルに応じた職場の働き方、職場においての将来性などの必要性、環境として、コミュニケーションはもちろん、職員教育・同調性（人間関係）・相談体制（何かあった時の相談体制「誰に聞いてもいいからね」）個別指導（OJT）も重要であると述べられた、逆に離職の多い職場は、先輩を見て学べなど、在籍している職員が大きく影響している。

【カテゴリー2】子育てライフを支援する

子どもが心身ともに豊かに成長するためには、子どもと家庭を一体的に捉えて、その家庭を支援することが必要です。保育所・認定こども園等は、多様化する働き方と子育て家庭のニーズに応えるための機能を充実し、子育て支援の拠点として、すべての子育て家庭を対象とした支援を展開します。

◆第4分科会 地域の子育て家庭への支援の充実にむけて

参加者数 98名

保育所・認定こども園等の役割として、保護者に対する支援と地域における子育て支援が明確に位置づけられています。また、新たな幼保連携型認定こども園では、子育て支援の実施が義務付けられています。一方で地域のつながりが弱まるなか、子育てに孤立感や孤独感を深めている家庭へのアプローチが、とくに重要な取り組みとなっています。

本テーマでは、地域子育て支援における保育所・認定こども園等の機能や、保育者に求められる知識や技術を、いかに地域支援に活かしていくかなど、地域の子育て家庭に対する支援のあり方について、研究を深めます。

座長	鹿児島県	高城保育園	園長	内野 久子
助言者		長崎大学	准教授	脇 信明 氏
意見発表者	宮崎県	旭保育園	主任保育士	上村 喜代美
	大分県	なのみこども園	保育教諭	柴田 祥子
	沖縄県	あじゃ保育園	保育士	國吉 弘
幹事	鹿児島県	共同保育所ひまわり園	園長	愛甲 明実
記録	鹿児島県	共同保育所ひまわり園	保育士	堅道 真也
	鹿児島県	高城保育園	主任保育士	中間 裕美

1 発表要旨

(1) 「子育てライフを支援する～地域の子育て家庭への支援の充実にむけて」

宮崎県 旭保育園

宮崎県都城市中心から20kmほど離れた南西部にあり、農業と畜産の町、高崎町の中心にある旭保育園。昭和52年に未満児中心の定員30名の小規模乳児専門園として発足。利用者の声、ニーズに合わせて障害児保育、祭日保育、一時保育などを行っており、家庭的な温かみのある環境づくりを大切にしている。

以前は親と同居という世帯も多かったが核家族化が進んでおり、親の生活スタイル優先の家庭など子育てをめぐる環境が変化してきている今、子育ては親だけではなく社会全体で支えていくことが求められている。これまでの実践を踏まえ、更なる充実に向けて考えてみた。

現在取り組んでいる子育て支援は大きく4つに分けられる。

①保護者の声に耳を傾け寄り添えるよう家庭との信頼関係づくり

・連絡帳 ・講演参観日 ・個人面談 ・保育参観 ・送迎時の声かけ など

②親子ふれあいを大切にし、絆を深められ、少しでも子育てが楽しいと思えるよう行事に取り入れていく。

・祖父母参観 ・もちつき大会 ・マラソン参観日 ・運動会 ・家族遠足 など

③異年齢との交流を通し、保育者と友達同士の絆を深めていく。

・ふれあい遊び

④地域との交流を通して、人とのつながりを大切にしていく。

・畑づくり ・デイサービス慰問 ・小学生との交流 ・地区老人会参加 など

また、毎月発行しているお便りの内容の充実を心掛けたり、近所の方との絆がより深められるように積極的に挨拶や声かけを心掛けた。

時代のニーズに対応し、保護者が安心して楽しみながら子育てできる環境づくり、地域との触れ合いを通して信頼関係を深めていきたい。



(2) 「地域の子育て家庭への支援の充実に向けて

～見つめる・よりそう・そだち合う～

大分県 なのみこども園

大分県中津市にあり、山国川下流の平野部に中津市の中核を形成している。人口は減少傾向にありながら転入が転出を上回っており合計特殊出生率は大分県平均を上回っている。しかし、少子高齢化、核家族の進展や地域のつながりの希薄化などにより、子育ての不安や孤立を感じる家庭もある。

なのみこども園では食育活動や自然を取り入れた遊びを多く展開し、1年間を通して心豊かにのびのびと過ごすカリキュラムに取り組んでいる。

本園は県や市による委託の子育て支援事業は受けていないため、全職員で「子育ての不安及び孤立感の解消」に研究の視点を置き子育てサロンを開設。

①中津市の平成29年4月1日及び平成30年4月1日の乳幼児数

②中津市における子育て支援事業

③アンケートの実施

④子育てサロン「ひだまり」

⑤地域住民との交流

などのアンケートや市全体での支援の状況をまとめた。

各地域や家庭の実態を踏まえるとともに、保護者の気持ちを受け止め相互の信頼関係をもとに保護者の自己決定を尊重することが重要。今後園をコアに「生まれてよかった」「産んでよかった」の言葉が聞けるように働きかけていきたい。



(3) 「あじゃ d e ゆいまーる」～地域とつながりをつくる～

沖縄県 あじゃ保育園

沖縄県那覇市にある安謝福祉複合施設内の0～100歳までの4世代の交流のなかで助け合いの心を伝えてきた。近年子育てを取り巻く環境も変化し、不安や孤立感から子育てが困難な家庭が増えてき

ている。保育園・保育士としての役割を改めて見つめなおし、それぞれの家庭に合った支援活動を考えていくことにした。

事例1「育児困難な母親と共に」

Aさんは精神疾患のため育児困難な状況を心配し、那覇市より支援要請があり受け入れる。面接時は目も合わせようとしなかったが、話す機会を多く持ったり、苦手なことを一緒に何回も繰り返し行ったり、細かいお知らせは父親に連絡を入れるなど配慮することにより徐々に信頼関係を築く。Aさんの話を聞いていくうちに時々気持ちの波も見られるが入園当初に比べると出来るようになっていく。卒園してもなお見守りが必要な親子なので夏休みにボランティアとして受け入れるなど必要に応じて支援していきたい。

事例2「個々への支援のありかた」

若年出産し、統合失調症のHさん。人との関わりが苦手で活動時間終了後に来所する。最初は保健師、祖母、Hさん、Aちゃんの4人で来所し、質問しても祖母が答える状態だったが、2回目は祖母と、3回目はHさんとAちゃんだけで来れるようになった。回数を重ねるごとに他の利用者がいても、距離はあるものの保護者と話せるように。活動時間中も会話を楽しめるようになったが、担当員を独占出来てじつくりと自分に向き合ってもらえる活動終了後の時間をすごく満喫する。来所が増えるごとに表情豊かになり、定期的に足を運んでくれるようになった矢先



Hさんの体調不良で入院。入院直前まで足を運んできてくれたのはこの場を必要としていたからではないか。

担任だけで抱え込まないような保護者援助の組織づくりや保護者の気持ちに寄り添い、受容し、一緒に考えていく姿勢が大切。行政と地域、保育園・支援センターが専門性を高めていけるようなネットワーク作りを目指していきたい。

2 討議内容

(1) 質疑応答

旭保育園

【Q】個人面談について若い先生は不安じゃないか？

【A】去年の担任や主任に入ってもらっている。

【Q】手作りの物を労働時間で出来る方法はどうしているか？

【A】午睡の間や4~5時など、職員の勤務時間でフリーの先生が出来るようにしている。

なのみこども園

【Q】アンケートの内容を考える際、全員でどのように話し合う？

【A】毎朝の朝礼や月に一回の職員会議、園内研修で周知したり意見交換することが出来た。

あじゃ保育園

【Q】小学生のボランティアとは具体的にどのようなことをしてもらっているのか？

【A】0, 1歳児のミルクやりや、給食の配膳などのお手伝いをしてもらっている。

【Q】Aさんとの関わりで気を付けていたことは？

【A】子どもを褒めることを大切にしたい。お母さんが出来たことも褒めるようにした。



(2) グループ討議

大きく2つの柱を立てて14のグループに分かれて話し合った。

①3つの提案から子育て支援において学びになったこと、大切だと思うことは？

・難しく考えずやれることからやっていく。・地域との関わりや交流、個々の支援の大事さ・個々の対応、言葉一つ一つの大切さ・個々の対応が難しい時もあるので専門職を入れる など

②子育て支援において「共感」や「信頼」をどう築いている？大切にしていることは？

・保健師に来てもらい、保護者や職員に指導をもらう・保護者の話を聞いたりメールでの情報提供をしている・駐車場での井戸端会議を大切にしている・昼寝の時間に話す時間を設けて信頼関係づくり、きっかけづくり など

3 まとめ及び助言

イベントや行事が、「行事のための保育園」になっていないか？今までやっていたからやるのではなく、「なぜそれをやるのだろうか？」と考えることが大事。子どもの主体性がそこにあるのか？子どもたちにとって必要なことであるかを考える。

また、親への関連性を再度捉えなおしてみる。「子ども」中心から「親も子ども」に脳をチェンジする必要がある。また、「この子」を共に育てるパートナーとしての関係を築く。パートナー関係とは、①補助的關係②依存的關係③相互教育的關係である。保護者も「お母さん」だけでなく一人の人間としての関わりをつないでいくことが大事であり、「子ども家庭福祉」という観点から、子どもの幸せだけでなく、子どもを含めた家庭が幸せになるように保護者へ向けても支援をしていくことが重要である。



【カテゴリー3】多様な連携と協働をつくる

子育て不安や児童虐待への対応等、子どもと子育て家庭への支援は、地域社会を基盤として多面的な取り組みを充実していくことが大切です。保育所・認定こども園等は、さまざまな機関・組織・団体や住民が連携・協働して地域の保育機能を高めるための中心的存在として、役割を果たします。

◆第5分科会 子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク

参加者数 117名

子どものより良い育ちに向け、保育所・認定こども園等、小学校さらに中学校との連携は、子ども一人ひとりの成長を連続的にとらえるために重要です。平成27年4月施行の新制度では、各市町村で策定された「子ども・子育て支援事業計画」等に基づき事業実施が行われ、各地域の保育施策の充実に向けては、保育・子育て支援関係者と各地域の行政機関等との連携や、信頼関係の構築も一層大切になっています。また、子どもの貧困に起因する課題への対応、児童虐待防止、病児・病後児保育など、保育所・認定こども園等単体のみならず、地域の関係各機関との連携・協働をもって進めるべき取り組みが数多くあります。

本テーマでは、子どものより良い育ちにむけて多様な機関との連携・協働のすすめ方や保育所・認定こども園等が果たすべき役割などについて研究を深めます。

座長	鹿児島県	清光保育園	園長	齊藤 恵信
助言者	第一幼児教育短期大学附属鹿児島第一幼稚園	園長代理	西元 道子 氏	
意見発表者	大分県	やまなみ保育園	主任保育士	日高 峰志
	沖縄県	宜野湾市立宜野湾保育所	保育士	比嘉 綾乃
			保育士	楚南 基子
	福岡県	恵愛保育園	園長	畠中 智美
幹事	鹿児島県	尾下保育園	園長	加治屋 哲
記録	鹿児島県	清光保育園	主任保育士	平 忠史
	鹿児島県	おののもりこども園	園長	中村 英嗣

1 発表要旨

(1) 『子どものより良い育ちに向けた関係機関とのネットワーク』

～育ちにつながる地域との連携の見直しと保育園の役割～

大分県 やまなみ保育園

別府市市立保育園で共同研究会を毎月開催し主任・副主任が集まり討議や実践を行い保育を学び合っている。同市では小学校内に幼稚園が併設され、保育所は年中で卒園、就学前の1年間を幼稚園に通う制度が存続している。そのため保育所は各関係機関および地域との連携を見直し、より具体的な保育所の役割を確認しているが、各機関の担当者の人事異動などに伴い連携の取りにくさも浮き彫りになっているため保育所側から積極的に働きかけていく必要性を感じている。

(2) 『子育て支援を深めるネットワーク』

沖縄県 宜野湾市立宜野湾保育所

沖縄県では県が推奨するペアレントプログラムを活用し発達に不安がある子の保護者、育児に困り感を抱いている保護者の支援を目的とした養育力の向上に向けた取り組みを研究している。保育士が関係機関との連携の下、保護者との間のオブザーバーとして取り組みを重ねることでネットワークの拡大の重要性を知ることが出来た。同時にその構築にかなりの労力を費やすこと、一度つながりを持つと相談・協力が容易になるということを学んだ。行政指導の下で保育者が保護者に向けて働きかけたことで6割の保護者が満足感・安心感・自己肯定感を得られたことは素晴らしい取り組みであると期待される。

(3) 『子ども・家庭を真ん中としたより良い連携を』

福岡県 恵愛保育園

福岡県では関係機関とのネットワークを研究することで行政の管轄において担当部署の違いからなる連携の二度手間を1本化することで行き届いた支援ができる事例を元に更なる効率化を働きかけていこうと考えていた。これは虐待の確認から行政の対応へ迅速な援助ができるすばらしい環境作りである。

2 討議内容

(1) 質疑応答

やまなみ保育園

【Q】年長児のいない園の雰囲気は、どうですか？

【A】不安なく子どもたちは育っている。4歳児が、たくましく育っている。

【Q】保健師との接続はスムーズですか？

【A】保健師につながることで、家庭との情報の共有が有効である。

宜野湾市立宜野湾保育所

【Q】現状把握表はホームページ等で確認できますか？

【A】他県でも行われているので、確認ができます。

【Q】ペアレントプログラムの機関の母体は公的機関ですか、それとも民間？

【A】沖縄県発達障害者支援センターがじゅまーという民間団体が、委託されて活動。

恵愛保育園

【Q】ネグレクトなど家庭に不安がある時は、どのように対応しているか？

【A】宗像市では、子ども家庭相談室に情報を伝え、児童相談所に連絡が入る。

(2) グループ討議

それぞれの地域における、連携に関する現状と課題に関してグループ討議を行った。

地域差はあるものの、学校の先生が来園して保育体験をすることも行ったり、学校行事へ参加したり概ね幼保小での連携は密にできているところが多かった。

また、発達支援員が来園し、子どもを見てもらったのち、保育士への助言等ももらっていた地域も

あり、様々な連携の具体例が挙げられた。

3 まとめ及び助言

同じような問題でも、地域、園によって違う。自治体によっても、差がある。自治体の財務体力の差が子育て支援にも影響している。そういった差をどう埋めていくのか？保育士の先生たちに何ができるのか？をまず考え、研修会等の場で情報を仕入れながら、行政にどのように働きかけるのか？を考えなければならない。できないではなく、「なにができるのか？」を主任会や園長会などで考えていくことが大事なのではないか。自分の園の基盤をしっかりと作ることが大切です。保育士養成校とも、ぜひ繋がってほしいと思います。活用して下さい。

【カテゴリー4】子育て文化を育む

子どもを対象とした犯罪や虐待の増加など、子どもたちをめぐる深刻な課題が増えています。次世代を創造する子どもをかけがえのない存在として愛しみ、価値を認め、子どもや子育てに多くの人が関心をもち、私たちの未来を創造していく子どもたちを社会全体で育てていく子育て文化を、保育所・認定こども園等が拠点となって地域社会に発信していきます。

◆第6分科会 「食を営む力」の基礎を培う食育の推進

参加者数111名

乳幼児期の食育の推進は、安全な食の確保やアレルギーへの対応などにとどまらず、「食べる」とや「いのち」への関心、さらに適切な食習慣の形成など、きわめて重要です。そして食に関する家庭との相互理解、さらには地域子育て家庭にむけた食育実践や地域の食文化継承などの視点から、家庭や地域との連携のもとで実践を進めることが必要となります。

本テーマでは、保護者、家庭や地域と連携した食育の実践、食物アレルギーへの対応、食をとoshした保育実践のあり方などについて研究します。

座 長 鹿児島県 こども園ほしのこ 園長 上之 悟史
助言者 鹿児島女子短期大学 非常勤講師 河井 マサ子 氏

意見発表者 大分県 植田こども園 栄養士 廣瀬 由美
福岡市 松翠保育園 調理師 矢岡 久爾香
佐賀県 みどり保育園 保育士 山田 千春

幹 事 鹿児島県 緑が丘保育園 副園長 有馬 周平
記 録 鹿児島県 こばとこども園 主任保育士 有馬 小菊
鹿児島県 高佑保育園 保育士 上和田 洋子

1 発表要旨

(1) 『SNS を活用した現代ニーズに応える食育支援～見て！作って！楽しむ離乳食』

大分県 植田こども園

大分市南部調理部会では意見交流の中で離乳食をテーマに研究を進めていくことになり、アンケートを行った結果、離乳食のレパートリーが少ない・作ることが負担・少量での栄養のバランスを取るのが難しい・モグモグカミカミが少ないなどが挙げられた。こうした保護者の悩みに保育所で援助・サポートする方法としてレシピ集とそれに連動した動画（nanbu キッチン）を作成することになった。1食分の目安量表・下ごしらえ表・栄養バランスを考えた献立の作成を踏まえ動画を撮影。時代のニーズに合ったやり方で保護者の悩み解決につながるのではないかと期待される。



(2)『こどもの喫食風景から保護者支援を考える～喫食状況観察記録の活用～』

福岡市 松翠保育園

「保育所における食事の提供ガイドライン」を元にアンケートを行い意見交換等を交え、給食担当者が保護者との関わり方に悩みを抱えていることをクローズアップした。これは保護者との普段からの接点が少ないために家庭の状況や悩みを知る機会が少ないことが要因とされる。そのため喫食風景を観察することで子どもの姿に保護者支援のヒントがあるのではないかという気付きもあった。

(3)『食育～食とうんちの関係 「食を営む力」の基礎を培う食育の推進』

佐賀県 みどり保育園

子どもの便秘で悩んでいる保護者からの相談から、便と「食」の密接な関係を知ってもらいたいと「うんち」をテーマに発表を行った。園独自で作成した「うんちカード」を取り入れることで子どもたちが自分の便に関心を持つようになり、さらに子どもの便から食生活を知る手がかりとなることもわかった。また、食育ボードを併用することで家庭でも苦手な野菜を食べるようになったなど、子どもたちの「心の満足感」も生まれた。保育所保育指針でいう「食べたいもの、好きな物が増える子ども」「食べ物を話題にする子ども」とはこういうことなのではないかと発見があった。

「食を営む力」を培うための各期の特徴として、授乳期・離乳期では、「安心と安らぎの中で食べる意欲の基礎作り」、幼児期では、「食べる意欲を大切に、食の世界を広げよう」がある。栄養士・調理師を中心に保育士、看護師などがその専門性を活かして子どもたちと保護者に分かりやすく「楽しく食べる」ことをこれからも伝えていってもらいたい。

2 討議内容

(1) 質疑応答

植田保育園

【Q】離乳食は0歳のイメージだが、第2回離乳食アンケートを0～2歳未満児にしたのはなぜか？

【A】2歳までのこどもの食事状況を知ることで、保護者が何に困っているかが見えると思った。

松翠保育園

【Q】給食担当者が喫食状況確認のために、保育現場に入って良かったことは？

【A】こどもの顔、名前が分かった。保育士にこどもの名前を出せばすぐに伝わるので、連携がスムーズになった。

【Q】給食担当者が保護者と接するのはいつ？

【A】夕方のお迎え時、食材横に置いてあるレシピを持ち帰る保護者に声かけしている。

みどり保育園

【Q】うんちカード使用後の野菜の残食はどうですか？

【A】残食は減った。野菜が苦手な子も頑張っている。「一口食べれたよ！」と嬉しそうに報告してくれる。大切なのは『心の満足感』である。

【Q】なぜ当日ではなく、明日の食材を陳列するのか？

【A】明日の給食に期待をもたせるため。

3 まとめ及び助言

まずは、「食」について基本の説明。食事をするということは、生存に必要・空腹感を満たす・嗜好を満足させる食文化・食事を共有することで人間関係の構築・健康の維持管理、に重要な役割を持つ。子どもの特徴として、体重当たりの栄養素の必要量が大きい。不足すると、心身・脳の発達、成人後の健康にも影響する。また、消化・吸収機能、代謝機能は未熟であるので、発育月齢に適した食材・量・食事回数・調理方法が必要である。感染や疾病に対する抵抗力が弱いので、衛生面に十分に注意する。成長・発育に個人差がある時期で、食習慣の基礎づくりの時期でもある。子どもが健康に成長するためには、日々の食生活の役割が重要であり、子どもの食生活には親や保育者による食環境が強く影響している。



「食を営む力」を培うための各期の特徴として、授乳期・離乳期では、「安心と安らぎの中で食べる意欲の基礎作り」、幼児期では、「食べる意欲を大切に、食の世界を広げよう」がある。乳幼児期は食事時間を一定にし、就学前までに生活リズムを身に付け、「食」に対する主体性を養う時期である。その大切な時期を過ごす幼児施設での食事の目標量は、一日の約半分を占める。食に関しては保護者と協力連携しあう必要がある。給食だよりを活用するなど、保護者にバランスの良い食事の例をみせたり、買い物・食事作りに子どもを参加させたり、園だけでなく家庭でも実行できることはある。また、生活リズムの要素（保育士）、健康になるための要素（看護師）、美味しい幸せを与える要素（調理担当者）、などの専門性を活かして、子どもたちと保護者に分かりやすく「楽しく食べる」ことを伝えていく。

◆第7分科会 保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～

参加者数63名

少子化や核家族化がすすむなか、社会における人と人、とくに子どもとおとながつながる 場面が少なくなりつつあり、社会における子ども・子育てへの関心低下につながっています。こうしたなか、子育て家庭や保育関係者にかぎらず、すべての人が子どもや子育てに関心をもつ取り組みが、安心して子どもを産み育てることができる社会づくりにむけて大切です。

本テーマでは、保育所・認定こども園等の地域にむけた諸活動の展開により、広く地域や国民に対して子ども・子育てへの関心や保育の営みの重要性を発信し、地域全体で子育てを考えていく取り組みについて、研究を深めます。

座 長	鹿児島県	わかたけ保育園	園長	池田 真吾
助言者		久留米信愛短期大学	講師	増田 吹子 氏

意見発表者	北九州市	北九州市保育士会	副会長	重國 香
	佐賀県	開成保育園	主任保育士	岡 佐代子
	長崎県	つばさ保育園	保育士	前原 祐子

幹 事	鹿児島県	川内すわこども園	副園長	帯田 英児
記 録	鹿児島県	川内すわこども園	保育士	外室 香織

鹿児島県

市来保育園

保育士

内匠屋 りえ

1 発表要旨

(1) 『保育士ナビゲーション～育て、育ちあう保育士の魅力を伝えて～』

北九州市 北九州市保育士会

昭和51年に「制度委員会」として発足。平成14年から「保育制度検討委員会」に名称変更し、保育所を取り巻く厳しい社会環境の中で、子どもの最善の利益を守るため、保育所の制度について考え、地域社会に子どもの育ちにおける保育所及び保育士の重要性を認識していただき、保育及び保育士の地位向上を目的として以下の4つの活動を実施している。



●一日保育士体験

地域の有識者に保育士体験をしてもらい、保育所の理解促進、地域社会との連携協力を進める。

●学生体験学習

小学生・中学生・高校生や看護学生を対象に、一日保育士体験を通して保育の楽しさを実感してもらい、命の尊さや保育の重要性を知ってもらう。

●就職セミナー

保育士養成校に出向き、保育所(園)の役割や保育士の仕事について正しく理解してもらい、保育所(園)への就職に繋げる。

●保育士ナビゲーション(出前講演)

小学校・中学校・高校へ出向き、保育士の仕事や保育士の魅力について講演し、保育所(園)の社会的役割を知り、保育士への関心を持ってもらう。

(2) 『「保育の社会化」に向けた園の保育や取り組みに関する情報発信について』

佐賀県 開成保育園



「保育の社会化」という概念整理から行い、これまで園が行っていた地域社会への情報発信、地域社会への関わりについて見直すこととした。

これまで日々の保育の活動内容については多く触れられているものの、担任が子どもの育ちをどのような教育的意図でその活動を行っているのかまではあまり書かれていない、いわば受け手である保護者がその情報をどのように理解しているのかを確認していないままの情報発信であることに気づいた。そこで、地域社会や保護者への情報発信、社会との関わりのあり方を模索し、とにかく実践することにした。まずは小学校と地域住民とで合同開催する開成文化祭に当園のブースを設置し、園の取り組みや保育に関するパネルを展示した。またそこで遊びのコーナーを作り、その遊びからどのように育ちが繋がるのかを解説することで、地域の方や小学校教員の保育に対する意識も変わってきた。そして保護者の意見についても「目的を知らせてもらえたら、行事への参加の仕方も変わっていた。」

次に、保育や担任の考えに対する保護者の認識を把握し、園本位の情報から保護者の理解を得られ

るような情報発信にシフトすることにした。既存の情報発信についてどのような印象を持っているかアンケートを実施した。それをもとに「保護者に分かりやすく」を強く意識したプリントを作成した。保護者より「写真や吹き出しなどで子どもの姿を伝えたドキュメンテーションは、遊びながら学んでいることがよくわかった」、「“10の姿”の記載や5領域の解説、ねらいの設定などから、担任の考えや教育的意図が分かりやすかった」、というプラスの意見をたくさんもらった。「保育の社会化」とは、保育の目的や教育的意図について発信し、保育を社会の一部としていくこと、という理解に帰着することになった。

(3)『地域の中で認められてきた「つばさ保育園」』

～保育園として、発信してきた役割は～』

長崎県 つばさ保育園

つばさ保育園は平成14年に認可外保育園として開所し、マンションの1室で、園児5名からスタートした。半年も経つと入園児はどんどん増え、「保育園開所」は必然性があったと確信することになった。働く職員は県内、県外に出かけ、全職員で研修に積極的に参加し、研修参加後は、職員会議で確認、同時に園内研修も進めていき、保育の質の向上に努めた。

4年間の開所で多くの人たちに当園の存在意義が認められたことを確信し、更なる拡充のため、認可保育園移行へと動くことになった。近くの卸団地で働く保護者や近くに保育園があればと願っていた従業員たちの思いと、卸団地の土地利用の大きな要因が認可保育園としてスタート。スタートしてからは、「健全な体にこそ健全な心が宿る」の思い…体をいっぱい使える広場を確保し、保育士の案による運動遊具をオリジナルで作り、広場の向こうにある7000坪の山も様々な手続きを経て購入し、以前は年長児だけだったしかけあそびが、山を使うことでもっと大きな工夫やしかけをすることができるようになった。今では保育士自身が想像力を高めることができ、楽しんで保育の展開をしている。

山を利用して広がる幼保小連携の取り組み、山での遊びは近くの幼稚園、保育園、小学校にも開放し、交流の場が広がっている。小学校の先生たちが山での遊びを楽しみにしており、先生たちによる保育士体験の実施へと繋がっている。

昨年度2つの小学校地域内にある学童保育所から、当法人に運営移譲の申し出があった。今年度4月から3つの学童保育所運営となった。これは、保育園を中心に目指した保育が認められたということだと思う。今後も保育園として伝えたい事を広げ、つばさ保育園独自の文化を継承していくことの必要性を強く感じる。



2 討議内容

(1) 質疑応答

北九州市保育士会

【Q】保育士ナビゲーションで、役員2～3名となっているが、クラス担任を持っている人もいるのか。

【A】役員は、主任や園長。現時点ではクラス担任はしていない。

【Q】有識者とは具体的にどのような方々なのか。

【A】公務員、議員、民生委員の方々が有識者となっている。

開成保育園

【Q】情報発信を変えた後、保護者との関係はどのように変化したか。

【A】何をしたいか分かりやすく伝えることで、保護者からの協力を得られやすくなった。

【Q】園だよりやクラスだよりの発信頻度は。

【A】月1回、月末に発信。内容は、前月の内容とその保育の意図、子どもの姿、翌月にどのような保育をしようと思っているか、その保育の意図などを書いている。

つばさ保育園

【Q】保護者からの苦情はないか。(衣服が汚れないか、怪我をしないか等)

【A】自園がこういう園である、という理解をいただき、同意書をいただいている。子どもたちは小さい時から山で遊んでいるので、どこが危険なのか、先生たちよりもよく分かっているところもある。

(2) グループ討議

○保育の営みを社会に向けて発信する意味

様々な意見がでていたが、まとめると、保育園と保育士は専門的観点から、日々の保育を実施していることを発信するためには、地域と密接にかかわることが重要であり、それが社会の理解を深め、保育士の地位向上につながるのではないかという意見が多かったようであった。



○園で取り組んでいる情報発信とその目的

情報発信方法及び内容に関する意見がほとんどで、方法としては、地域行事等への参加、ホームページ、おたより等が主であった。その他、職場体験や家庭訪問をするとの意見もあった。内容に関しては、感染症、食育、子育て、防災等を発信しているとの意見が出た。

3 まとめ及び助言

○北九州市保育士会

目的を持って、計画を立てて、実行していることをきちんと振り返って評価する、いわゆるPDCAサイクルがきちんとなされている状態で活動が続いていることに意義があると感じた。

保育士ナビゲーションは、体験とは違う視点で保育について知る機会になっており、保育や保育士について、一度に多人数に伝えられる利点がある。

○開成保育園

定義付けをきちんとするというのは、何か研究をしていく中で大事なことであり、ねらいの中に“10の姿”の活用があり、5領域よりも分かりやすい。

情報発信をするということには、いろいろな利点があるが、いろいろなところとの繋がりができることも一つの大きな利点である。発信するための振り返りやその整理をするという作業には、学びが深まり、保育者が同じ目線で働けるという利点もある。

○つばさ保育園

開所当初から、保護者の要望を聞いており、「保護者と関わろう」「保護者と連携を取ろう」との意識が、必然的なものとしても、はじめからそこにあったのではないか。

地域との関わりも必要性があつてのことで、結果的に保護者や地域社会との関係がとても密であったと感じる。“広がっていった遊び場”というよりは、“意欲的に広げていった遊び場”という印象がある。遠方に出向いて、よりよい環境を求めていったところが意欲的な取り組みである。

【カテゴリー5】子育て・子育てを支援する仕組みをつくる

わが国の家族関係のGDPに占める割合は諸外国のなかでも大変低い水準です。こうした環境を改善するとともに、日本の未来の社会を担う子供を中心において、子どもたちが豊かに育つ環境を社会全体が支えていく仕組みについて研究・提言します。

◆第8分科会 『公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割』

参加者数41名

保育・子育て支援の今日的な流れにおいては、都道府県や市町村に保育制度・施策に関する責務が増大する方向性であり、保育の質やその実践において地域間格差が進むことが懸念されます。

本テーマでは、地域全体の保育の質の向上にむけた公立保育所・公立認定こども園等の意義や役割意識の普及、行政機関でもある特性を活かした具体的実践のあり方などについて研究を深めます。

座長	鹿児島県	双葉保育園	園長	吉徳 淳之介
助言者		鹿児島大学	准教授	金 娟鏡 氏

意見発表者	佐賀県	鳥栖市立保育所白鳩園	主任保育士	豊住 佐知子
	長崎県	諫早市立諫早中央保育所	所長	堤 亮子
	熊本県	八代市立千丁みどり保育園	栄養士	岩坂 慶子
			保育士	市野 真奈美

幹事	鹿児島県	白鳥保育園	園長	原口 きよ子
記録	鹿児島県	白鳥保育園	保育士	丸山 苑華
	鹿児島県	鹿児島市立原良保育園	保育士	内藤 豊子

1 発表要旨

(1) 「公立保育所の使命と地域社会での役割

～鳥栖市公立保育所が実践していること～

佐賀県 鳥栖市立保育所白鳩園



鳥栖市立白鳩園では、市の事業に協力や参加したり市の方から要望、相談があれば調査や資料提供など公立だからこそできる事を進んで行っている。私立の保育園等の入所が困難な場合にも受け入れをしたり待機児童が出ないように努力をしている。

また、食育や職場体験学習、看護実習等を通して地域との関わりも密に取っている。公立保育所だからこそ出来ることや公立保育所ならではの悩みなどを発表した。

(2) 『「公立保育所の在り方について」

～公立としての他機関とのつながりの重要性について～

長崎県 諫早市立諫早中央保育所

諫早市立諫早中央保育所では、療育へ力を入れていることや疾患のある子どもへの対応などを事例をあげて発表した。

疾患のある子どもに対して関係機関と情報交換等を密に取り園内での研修や情報共有をすることで子どもへのケア等を行った。

市との協力の下病院、看護師等の連携がしやすく、療育や病児保育に力を入れることができた。

(3) 『笑顔あふれる食育活動＝合言葉は「いつも子どもをまん中に」＝

～地域社会における公立保育園の使命とその役割について考える～』

熊本県 八代市立千丁みどり保育園

八代市立千丁みどり保育園では、食育を通して地域と連携しながら家庭での保護者と子どものスキンシップや子どもへの食育の大切さを教えている。

地域の方とおにぎりパーティーなどをして交流を深め地域にアプローチしたり、栽培から調理まですることで食への興味や関心へつなげるなど食育へ力を入れている。

食育を通して地域の公立保育園として、園、学校、関連機関との連携の要となれるよう、保育園保育を地域に発信できるようにしていきたい。



2 討議内容

(1) 質疑応答

鳥栖市立保育所白鳩園

【Q】保育士不足に対して

【A】嘱託職員の求人は、常にハローワーク、園に掲示している。また、嘱託職員には、時間外勤務の手当は付く。園外研修も順番で受けてもらっている。

諫早市立諫早中央保育所

【Q】てんかん児対応

【A】てんかん発作→保護者へ連絡→看護師が対応（座薬等）

【Q】幼稚園との交流はありますか。

【A】避難訓練を一緒にしたり、仲良しタイムで交流を図ったりしています。大きな行事は別です。

八代市千丁みどり保育園

【Q】支援センターの職員の取り組みと関わりはどんなことをしていますか。

【A】1歳半・3歳児検診のお手伝い、支援センターを進める。

【Q】献立の魅せる化の工夫

【A】保護者に興味をもってもらえるよう、献立表のメニューの名前を工夫したり、（例：おばちゃんの味ぼたもち・からだが喜ぶ雑穀せんべい等）保護者と話したりすることで作り方に興味をもってもらう。

(2) グループ討議

グループ討議では、地域における公立保育所・公立こども園の現在とこれからというテーマで、現在行っている取り組みについて良い点・悪い点とその原因を探りこれからについての討議がなされた。

公立保育所だからこそ行政や地域との繋がりがある等良い点がある一方、公立保育所ならではの人事異動や財源の確保などの悩みや悪い点があげられ、これからについての討議が活発になされていた。



3 まとめ及び助言

公立園の役割・意義・具体的な実践の在り方を改めて問う。自分たちの保育を見直す良いきっかけである。園内のお手紙や広報誌に実践している保育内容を載せ、保護者や地域に知らせる。

職員はお互いに、敬意と信頼し合い、挑戦する勇気が大切。こういった力を発揮していく仲間と共に、質の向上に繋がる。

◆特別分科会 今だから伝えたい“郷土”の教育力

参加者数191名

近年、急速に少子化や核家族化が進む中、子どもたちの異年齢交流の減少や地域との結びつきの希薄化等により、地域の教育力が低下していることが指摘されています。

本県にはかつて西郷隆盛をはじめ、多くの偉人を育てあげた『郷中教育』と呼ばれる薩摩藩伝統の縦割り教育があり、その教えは今も尚、継承され続けています。

子ども達が郷土を愛し、次世代を担っていくためには、郷土への誇り、愛着の心、郷土愛の気持ちを子どもたちの心に伝えていかなければなりません。

本テーマでは歴史の力を未来へ繋ぐべく、私たち保育者にとって何ができるのか、日々の実践を踏まえながら考えていきたいと思っています。

第1部：基調講演「維新の原動力となった郷中教育」

講師：志學館大学 教授 原口 泉 氏

第2部：パネルディスカッション

・コーディネーター	志學館大学	教授	原口 泉 氏
・パネリスト	一般財団法人自彊学会	代表理事	宮内 信正 氏
	長崎県さざなみ保育園	園長	大長 光一 氏
	大島地区子ども会育成連絡協議会	会長	保池 穂好 氏

司 会	鹿児島県	だるま保育園	園長	秋吉 龍成
幹 事	鹿児島県	照島保育園	副園長	吉尾 圭介
記 録	鹿児島県	だるま保育園	保育士	中里 遥
	鹿児島県	串木野保育園	副園長	島津 弘道

1 講演要旨

(1) 基調講演 『維新の原動力となった郷中教育』

志學館大学人間関係学部教授 原口 泉 氏

郷中教育とは、薩摩藩の時代に郷土が居住していた郷と呼ばれる外城の城下において、幼児から青少年に対して行われていた、特徴的な鹿児島における地域教育のことを指す。そこでは、四書五経などの学問的な教えのみならず、山坂達者と呼ばれる身心の鍛錬や人間としての品位・品格を備えるための道徳教育も行われていた。

県内に散在する麓と呼ばれる侍の集落において、それぞれ郷中教育の決まりごとが整えられていたが、どれもその根底にある考えは、①全体の中で人は育つ②人は一人では生きていけない③何に対しても思い切り挑む、であった。

まず、①についてであるが、優れた師の下で、素晴らしい先輩を目の当たりに、一緒に学び合う仲間がいることが大切であるという考え方である。それはあたかも、たくさんの芋を水の入った桶に入れてかき回すことで、お互いが擦れ合って泥が落ち、きれいな芋になることと同様である。能力の違



う仲間と共に学び、遊び、苦勞することで、方限（ほうぎり）という郷中単位の連帯意識を高めるほか、誇りと自尊心を育むことができていたのである。

次に、②については、鹿児島において現在も行われる七草祝いの風習に顕著である。数え年7歳の子どもは、1月7日に親に連れられ近隣の7件に出向き、その家の七草粥や七草寿司を分けてもらい、その後寺社へ参拝するというしきたりである。元気に育っていることの披露のほか、これからも健全な育ちを見守ってもらいたいという家族の願い、また当人に対しても「地域の皆さんから、大切に守り育ててもらっている」という意識を持ってもらおうという意味合いもある。



そして、③については、当大会スローガンになっている「泣こかい 飛ばかい 泣こよっかひっ飛ば」という、昔から鹿児島に伝わる言葉にその思いが込められている。事の大小にかかわらず「やってみようか、どうしようか、できるかな、できないかな」と迷ったときに、師や先輩の「思い切ってやってみろ。やってみなきゃ、うまくいくかどうか、できるかできないかはわからないぞ。」という力強い励ましである。郷中の子どもたちは、何に対しても前向きに挑んでいく姿勢を忘れてはならないという考え方を幼い時分から身につけているのである。

から身につけているのである。

明治に入るまで行われていた郷中教育には「鹿児島の地に、このような若者が育ってほしい」という、先人たちの思いや知恵が詰まっていた。そこでは、日本や世界の歴史、地理、文化など多くの学問のほか、詮議（せんぎ）という判断力を鍛える問答、自顕流のような剣術練習、野山を越えて歩き通す妙円寺詣りのような鍛錬も行われていた。

その教育を受けて育ち、さらに次の若者たちを育成指導していた西郷隆盛や大久保利通らが、世界を見つめる広い視野を持つ薩摩藩主島津斉彬と出会い、その力を発揮すべく舞台を用意されたことで、明治維新という、時代の突破口を作ることができたのである。

（２）パネルディスカッション（発表順）

①長崎県 さざなみ保育園

近年、働きながら子ども達を見てもらう企業型保育の話が取り上げられているが、そのような保育の原点が長崎県の出津教会にある。出津協会のド・ロ神父は、明治18年に若い女性たちの自立を支援し、女性たちはここで綿の紡績・染色・製織・素麺やパスタ・パンの製造、醤油の醸造等の技術を身に付け、生活の基盤を作った。その鰯網工場の建物で、作業所で働く労働者の子ども達を預かり、給食も自園調理を行うなど、現在の基準に近い保育環境を百年以上も前に整えていた。200人程の子ども達を預かっており、2歳から10歳を3クラス（少年組・少女組・幼少組）に分けて悟りを聞いていた。さざなみ保育園のホールはドーム型になっており、母親のおなかの中で、みんな母に守られていると伝えている。いま一度原点に立ち返り、ド・ロ神父の言うように「母の心を持って、子どもに接するように」していかななくてはならない。

②鹿児島県 一般財団法人自彊学舎

鹿児島市常盤にある自彊学舎は、戦争を挟んで一時途絶えたものの、およそ60年前に復活された。現在、小学生から90歳まで在籍し、郷中教育の伝統を今に伝えるべく、様々な活動を行っている。

学舎では鹿児島の3大行事である「妙円寺詣り」「赤穂浪士義士



伝輪読会」「曾我ドンの傘焼き」をはじめ薩摩藩を中心に伝わった古流剣術の「自顕流」、「示現流」（横木打ち、立木打ち）の伝承や桜島遠泳、体力・気力作りとして山坂を歩き足腰を鍛える「山坂達者」などを通して薩摩藩独自の縦割り教育を次世代へ繋ぐ活動を行っている。今日では鹿児島県地域塾第1号として認定された親子チャレンジ塾を通して伝統文化体験、農業体験、自然体験活動等も行っている。

明治維新の原動力は郷中教育であり、薩摩の強い土風作りは郷ごとの集団活動によって培われてきた。これからも地域に密着し、先人達の教を次世代を担う子ども達に伝えていきたい。

③鹿児島県 大島地区子ども会育成連絡協議会

鹿児島県大島郡宇検村にて子ども会活動を行っている。活動の例としてリュウキュウアユの保全活動：産卵場所の確保、親子茶道教室など伝統文化に触れる体験活動、大島地区5市町村の子ども会におけるリーダー研修会、KYT（危険予知トレーニング）等が挙げられる。親子教室については、当初10名程だった参加者が現在では50名にもものぼる。子どもは親の姿を見て育つ。このような親子での活動は子どもが育つうえで大きな意義があると感じている。

子ども会活動を通して、ネガティブな言葉や愚痴は子どものリーダーシップの芽をつぶしてしまうので前向きな言葉を使う事がとても大切であると感じている。

疲れた→今日も1日頑張った、もうしたくない→明日も頑張ろう!! など前向きな言葉に変換することを心掛けている。これからも FOR YOU（あなたのために）(子どもの為に)という思いで子ども会活動を続けていきたい。

2 討議内容

(1) コメント

(保池先生) 昔、部活で、山坂達者を行った。鍛えるだけではなく、草花観察や遠くを見て視力をよくする為でもあった。

(宮内先生) 車の中で親子の会話があり、夫婦の会話がある。家庭の仲が良ければ、子どもの心も平和。また、地域の人との関わりも大切である為、親子チャレンジを取り入れている。

(原口先生) 異年齢集団での教育が、郷中教育の良さである。わからない事は、上の人に教えてもらったり、年上の人と関わる事はとても大事で良い事である。

(大長先生) 食育として幼少時に、その土地の良い物を食べ、舌を鍛える。子どもは正直な為、美味しい物はよく食べる。3歳までの味覚がこの先につながる。また、食器、かざりつけ、盛り付け方なども大切であり、親にその能力がなくなっている今、保育園で力を入れる必要がある。



(2) 質疑応答

【Q】KYTで実践されていることは？

【A】(保池先生) 川に魚やエビを獲りに行く。事前に写真を見せ、石垣の何処が危ないか？などを質問し、考える事で自ら「こけ」があるから危ないなど気付きも増えていく。

交流会報告

鹿児島サンロイヤルホテルにて504名が集い、交流会が開催された。奄美民謡の唄者 幸野泰士氏がオープニングを飾り、荘重でのびのある島唄で皆様を歓迎し、開宴した。

島唄の余韻が残る中、九州保育三団体協議会 佐藤成己会長より主催者挨拶、岩下修一大会実行委員長より歓迎の挨拶、来賓の三反園訓鹿児島県知事より来賓を代表しての挨拶を頂戴した。その後、来賓の紹介が行われた後、日本保育協会九州地区連合会会長も務められる九州保育三団体協議会 福嶋義信副会長より声高らかに「乾杯」のご発声。美味しい料理と鹿児島の焼酎に舌鼓を打ちながら笑顔で交流の輪を広げられた。また、このとき、お忙しい中、駆けつけてくださった尾辻秀久参議院議員より、これからの保育の展望などのお話を頂戴することが出来た。

アトラクションでは、サクソとギターのデュオ、Alsomitra（アルソミトラ）の演奏が行われ、クラシックで培われた多彩なサクソフォン奏者、吉澤レイモンド武尊氏とスタイリッシュでキャッチーなギターを得意とする山崎トム氏のデュオが奏でる様々なジャンルが融合された音色に会場は魅了された。次に徳之島出身のミュージシャン城朋仁氏の軽快な音楽と楽しい振り付けに会場は一体となり、宴席の喜びを象徴する歌と踊りである奄美地方のダンスミュージック「六調」で会場のボルテージは最高潮に達し、その流れのまま、鹿児島県内各地から集められた特産品や「森伊蔵」などの銘酒が当たる抽選会が開かれた。

宴が終演に向かう頃、今回の司会も務めて下さったザ・キングストーンズ2代目リードシンガー、ジミー入枝氏が装いも新たに登場し、「グッド・ナイト・ベイビー」などの名曲を披露、九州私立保育園連盟会長でもある九州保育三団体協議会 篠原敬一副会長より中締め言葉を頂き、皆様との再会を約束して閉宴した。



3日目 7月13日(土)

総会

- (1) 議長団選出
- (2) 議長団あいさつ
- (3) 第5回九州保育三団体研究大会報告(熊本市)
- (4) 分科会報告
- (5) 大会宣言(案)



記念講演

演題 「私の子育て術」

講師 哀川 翔 氏(俳優、タレント、歌手、ラリードライバー)

記念講演では鹿児島県鹿屋市出身の歌や映画、テレビ番組などで大活躍の俳優でタレントの哀川翔氏を講師にお招きし、「私の子育て術」と題して講演をして頂いた。

1961年に鹿屋市に生まれ、一世風靡セピアでレコードデビューをしてテレビドラマや映画など今現在でも活躍を見せる中、五人の子どもの父親でもある哀川翔氏は、子ども達には嘘はつくな、ゴミはまたぐな、食卓は家族そろってなど厳しい教育をしていたと語った。

厳しい教育の反面、学校の行事には率先して参加していたなど子ども達に愛情を注いでいた。

厳しくもあり優しい父親のもとで育った娘の福地桃子さんも今では朝ドラなどで大活躍を見せている。

年に数回鹿児島に帰ってきているという哀川氏は会場に集まっていた方々に鹿児島弁での挨拶などをして喜ばせていた。

最後に講演に来ていた数名から夫婦円満の秘訣などの質問を受けて快く答えていた。



次期開催地引継ぎ式・閉会式

- (1) 次期開催地あいさつ(福岡市)
- (2) 九州保育三団体協議会旗引継ぎ
- (3) 閉会の辞



第6回九州保育三団体研究大会 大会宣言

「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」を大会テーマとして、ここ鹿児島において第6回九州保育三団体研究大会を開催しました。

子育て支援環境が充実拡充される中、保育教育実践の向上のため九州各地から1,300名を超える保育関係者が集い、研究・討議が繰り広げられ保育教育の研究を研鑽することができました。

新たな「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を基に保育実践が積み重ねられ一年が過ぎ、養護と教育に対する新たな気づきと、保育課題に対する更なる取組みがなされてまいりました。その中で、子どもの育ちへの、これまでの保育の取組みが、重要かつ重視されていることを改めて確認できたことで、我々保育関係者のスキルアップが更に求められていることを実感することとなりました。

また、そのスキルを地域社会全体へと広げ、関係機関との連携を一段と強化し、子どもの育ちを大きな視野で支援していくことも必要とされてきています。このことは、子ども・子育て支援制度下における保育施設への期待であり、子育て支援の核となることの証でもあります。

一方、子ども子育て支援制度も施行後5年となり見直しが行われます。そこには、公定価格の包括方式への転換が提案されています。保育の質を支えるためには、これまで同様に積み上げ方式の堅持が必要です。

また、制度の経過措置や特例等、継続される事柄については、保育教育の質の担保を私たち自身が認識し、その実践をしっかりと行っていかなければなりません。そのためにも、キャリアアップ研修の仕組みを確実に実行し保育者の資質向上を図ること、その後も終わることのないフォローアップ研修が必要不可欠となります。

これらの継続的な取組みにより、これまで以上の保育士等の処遇改善を国への要望へと反映させ、保育士等の人材不足解消、人口減少地域社会での子育て支援の充実と施策向上等を求めてまいります。

社会の変容とともに子育て生活環境や子どもの育ちも多様化している現代に、幼児教育・保育無償化は、子どもの育ちにとって大きな影響を及ぼすものと考えられます。

我々は、これまでの保育実績に、より一層磨きをかけ、社会変化にしっかりと向き合い対応していくことが求められています。

私たち九州保育三団体協議会保育関係者は、本大会において、保育教育・子育て支援の先導者として、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現」と「すべての子どもの最善の利益を保障する」為に、さらなる保育の質の向上へ努めるとともに、これまで培ってきた保育の営みの大切さや、これからの先駆的な保育実践の取組みを社会に発信していくことを宣言します。

令和元年7月13日

第6回九州保育三団体研究大会参加者一同

すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして



第6回九州保育三団体研究大会鹿児島大会実行委員会

第7回九州保育三団体研究大会 福岡市大会へのご参加もよろしくお願い致します。

期日：令和2年7月8日（水）～10日（金）

会場：アクロス福岡 シンフォニーホール 他